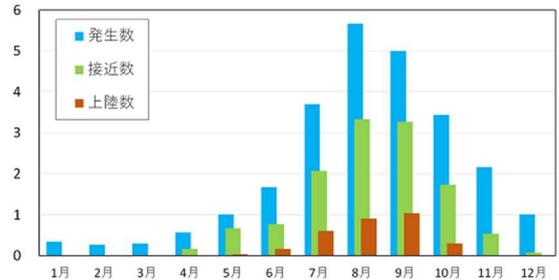


【9月の気象】

9月は、「仲秋」「月見」など秋を意味する季語が多いですが、最高気温が30度を超える真夏日も多く、まだまだ暑い日が続きます。昨年の9月は、県内アメダスの最高気温で見ると30度を超える真夏日が29日、35度を超える猛暑日は11日ありました。今年も、農作物の管理や熱中症に注意が必要です。

「台風」も9月の季語となっています。9月は台風の発生数、日本への接近数、上陸数が多くなる月です。

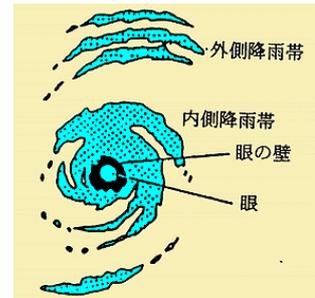
平年値では年間の発生数は25.1個で、9月は8月に次いで発生数が多くなっています。上陸数は9月が一番多くなっています(第1図)。気象庁では台風が発生すれば、ホームページ等で台風の進路予想を随時発表しています。また、松山地方気象台では、愛媛県に台風が影響すると予想される場合には台風に関する愛媛県気象情報を発表し、台風による愛媛県への影響(暴風、大雨、高潮等)についてお知らせします。これらの情報を活用し早めの対策をお願いします。



第1図 月別の台風発生・接近・上陸数の平年値 (縦軸: 個数、横軸: 月、1991年~2020年の30年平均)

【気象用語】台風について

熱帯の海上で発生する低気圧を「熱帯低気圧」と呼び、このうち北西太平洋(赤道より北で東経180度より西の領域)または南シナ海に存在し、なおかつ低気圧域内の最大風速(10分間の平均風速)がおおよそ17 m/s以上のものを「台風」と呼びます。台風は、赤道に近い低緯度では西に移動し、太平洋高気圧のまわりを北上して中・高緯度に達すると、上空の強い西風(偏西風)により速い速度で北東へ進むなど、上空の風や台風周辺の気圧配置の影響を受けて動きます。夏は偏西風が日本より北側を流れていますが、秋になると次第に日本付近まで南下するようになり、台風の進路に大きく影響してきます。また、日本付近に前線が停滞していると、台風が前線の活動を活発化させ、大雨となることがあります。

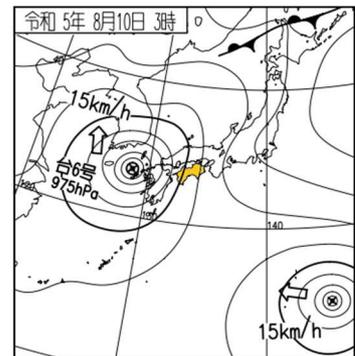
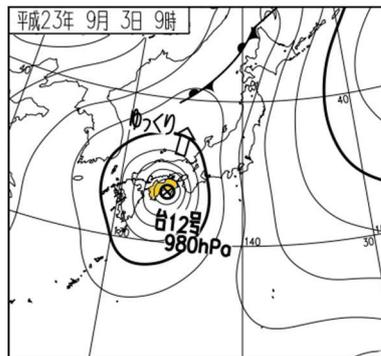


第2図 台風中心付近の降雨帯

台風は巨大な空気の渦巻きになっており、地上付近では上から見て反時計回りに強い風が吹き込んでいます。そのため、進行方向に向かって右の半円では、台風自身の風と台風を移動させる周りの風が同じ方向に吹くため風が強くなります。台風は積乱雲が集まったもので、強い風とともに雨を広い範囲に長時間にわたって降らせます。垂直に発達した積乱雲が眼の周りを壁のように取り巻いており、そこでは猛烈な暴風雨となっています(第2図)。この眼の壁のすぐ外は濃密な内側降雨帯が占めており、激しい雨が連続的に降っています。さらに外側の200~600 kmのところには帯状の外側降雨帯があり、断続的に激しい雨が降り、時には竜巻や線状降水帯が発生することもあります。これらの発達した雲域は台風の周りに渦を巻くように存在し、南海上から暖かく湿った空気を次々と補給することで、積乱雲は維持発達します。

2011年(平成23年)9月に高知県東部に上陸した台風第12号(第3図)では、紀伊半島で深層崩壊や土石流が多数発生し甚大な被害が発生しました。和歌山県南部のアメダスでは3日間の総雨量が1112mm、1日の降水量が600mmを超える記録的な大雨となりました。愛媛県では東予で大雨となり、アメダス成就社では総雨量425mmを観測しました。

2023年(令和5年)8月に九州の西海上を北上した台風第6号(第4図)では、四国で大雨となり高知県のアメダスでは5日間の総雨量が972mm、1日の降水量が500mmを超え、線状降水帯が発生しました。愛媛県では、総雨量がアメダス成就社で377mm、アメダス瀬戸で最大瞬間風速が32.5m/s、東予には線状降水帯が発生し、顕著な大雨に関する気象情報や土砂災害警戒情報が発表となりました。



第3図 2011年9月3日の天気図

第4図 2023年8月10日の天気図